

令和二年七月十日発行
皇學館論叢第五十三卷第二号 抜刷

有吉佐和子における中国題材小説の考察

——『孟姜女考』を中心に——

張

文

宏

有吉佐和子における中国題材小説の考察

——『孟姜女考』を中心に——

張 文 宏

□ 要 旨

万里の長城にまつわる孟姜女の伝承は、中国では遍く知られている。有吉佐和子は、訪中を機に、この伝承を物語に仕立て上げた。それが、一九七三年に発行された『孟姜女考』（新潮社）である。初出は雑誌『新潮』（一九六九年一月号）である。それは、日中国交正常化（一九七二年九月）以前のことであり、日本においては、新しい中国の姿がまだ一般には伝わっていない時代であった。作中の語り手・会田崎子は、三度の訪中を通して、人びとから聞くそれぞれの孟姜女のイメージの落差に戸惑うのである。

本稿では、作者・有吉佐和子の中国題材小説の一つである『孟姜女考』を対象に、伝承説話の変貌とその意義とについて、作品の分析を通して考察する。ここには、両国を理解しようとする作家の姿勢と意図とが窺える。

□ キーワード

有吉佐和子 『孟姜女考』 伝承の変化 新中国の変貌

はしがき

万里の長城にまつわる孟姜女のご故事は中国では古くからよく知られている。有吉佐和子はこの故事を活用し「孟姜女考」という短編小説を作り出した。「孟姜女考」は、雑誌『新潮』（一九六九年一月号）に発表され、一九七三年に単行本『孟姜女考』として新潮社より出版されている。当時、中日両国はまだ国交を樹立していなかったから、日本の国民の殆どは新しい中国の社会の現状がよくわからなかった。だが、一部分の日本人はこの小説を通して、中国の有様が理解できるようになった。

本稿では『孟姜女考』を考察の対象に、中国に伝承される「孟姜女」のイメージとその変貌を考察してみようと思う。作家有吉佐和子の至りついた「孟姜女」は、彼女自身にも思いがけないものであった。そこからは、中日両国の伝承の差異というもの、また世界観の相違が浮かび上がる。日本知識人の視点を通して、新中国の変貌がどのように映ったのかについても考察してみたい。

一、訪中体験で生まれた『孟姜女考』

一九六一年夏、中国訪問中の有吉佐和子は、通訳の趙秀桂から聞いた孟姜女のご故事と、河北周辺で見聞した孟姜女のご故事とを合わせ『孟姜女考』を綴った。孟姜女は、万里の長城の夫役に駆り出された夫が、ついに帰らないのを知り旅に出る。その旅中に夫の死を知らされることになった。その時の悲しみの涙で長城が崩れると、夫の遺骨が表出

するという物語伝承である。

作中では、有吉佐和子は主人公である会田崎子に投影し、会田崎子の視点を借りて物語る構成になっている。その梗概は次の通りである。

中国対外文化協会の招待で訪中した作家である会田崎子は、八達嶺長城を見学に行く車中で、通訳である趙秀桂から初めて「孟姜女」の故事を聞き、心の中に美しく可憐なイメージを残していた。だが、崎子は、同行者の話により「孟姜女」の故事が内容的に少しずつ違っていることを発見した。帰国後、彼女は中国通のCさんから「孟姜女」の故事を確認してもらった。この故事に関心を寄せた崎子は、折に触れて文献を探して読んだ後、孟姜女に対するイメージが変ってきたのであった。三年後、再び中国に来た会田崎子は、山海関を観光した時に改めて「孟姜女の寺」を訪ねていった。そこで崎子は孟姜女の座像を眺めながら、古い「孟姜女」の故事における可憐さとは異なる、目の前の「孟姜女」座像に強大で豪放な孟姜女像を発見するのである。この両者にある大きな懸隔に気づき、ショックを受けて混乱してしまふ。

有吉佐和子の作品『孟姜女考』は、紀行文の書き方に近く、小説らしくはない。だが、『孟姜女考』の成立は、有吉佐和子の訪中とは切っても切れない縁があることは確かである。この小説の創作意図を掘り出すために、有吉佐和子の訪中についても、詳しく検討しながら考察を進めてみようと思う。

二、中国典籍における孟姜女の記事

孟姜女は中国では最初に「杞梁之妻」というモデルからだんだん変化してきた人物である。春秋時代の『左伝』に

は「杞梁之妻」が記載されている。本稿では中国の典籍はすべて中国語であるが、その後ろの括弧に付けた日本語訳は筆者によるものである。

齊侯帰、遇杞梁之妻於郊、使用之。辞曰。殖之有罪、何辱命焉。若免於罪、猶有先人之敝庐在下。妾不得与郊弔。齊侯弔諸其室。⁽¹⁾

(齊国の庄公は戦死した杞梁の柩を連れて帰り、郊外で杞梁の妻に出会い、弔いをさせる。杞梁の妻は「杞梁に罪があれば弔問の必要はない。罪がなければ私宅に弔問すべきだ」と断った。そこで齊国の庄公は、杞梁の家に弔問に向いた。)

『左伝』には杞梁の妻は礼儀をわきまえる女性として描かれたが、その名前や経歴などには一切言及していない。また戦国時代の『礼記』にもほぼ同じような記載がある。

齊庄公襲莒於奪。杞梁死焉。其妻迎其柩於路而哭之哀。⁽²⁾

(齊国の庄公が莒(現在、山東省莒県)を征伐した戦争で、杞梁は死んでしまった。彼の妻は柩を出迎え、道端で声を上げて泣いた。)

右の記載では『左伝』と同様に、杞梁の妻が柩を出迎えて大声で泣くということだけを述べているが、「杞梁の妻」の名前や性格などは全く描かれていない。西漢の後期に至り、「杞梁の妻」はまだ身分不明であったが、故事の筋立ては大きく変化してきた。劉向『列女伝』には、「杞梁の妻」が夫を慟哭する上に、城の崩れと、淄水に身を投げた

ことが追記されている。

杞梁戦死。其妻収喪。(中略) 哭夫於城、城為之崩。自以無親、赴淄而薨。^③

(杞梁は戦死した。彼の妻は喪に服する。(中略) 彼女は城の下で、夫の死を悲しみ慟哭すると、城が崩れてしまった。そして杞梁の妻は、淄水に身を投げて死んだ。)

しかし、唐代に至り、貫休という僧侶は「杞梁妻」という詩歌を書き加えて、初めて「万里の長城」を書き込み、内容を一変させた。

秦之無道兮四海枯、築長城兮遮北胡。築人築土一万里、杞梁貞婦啼嗚嗚。(中略) 一号城崩寒色苦、再号杞梁骨出土。^④

(秦始皇は暴虐の限りを尽くし、四方に災難をもたらした。胡人の侵略に抵抗するために百姓を集めて長城を築くことになる。築城に駆り出された人たちは、一万キロの長城を築いていると、夫役の妻の泣き声が聞こえた。(中略) 彼女は悲しい泣き声を立てると、急に長城が崩壊してしまった。再び慟哭すると、杞梁の遺骸が土の中から出てきた。)

上述の内容により、杞梁は斉国の官吏から秦の夫役へと変わり、「杞梁の妻」は初めて万里の長城と繋がっていた。それから、「杞梁の妻」は、万里の長城とは切っても切れない縁を持つことになっている。しかし、いつから「杞梁の妻」は「孟姜女」という名前を付けられたか。北宋の教育家である孫奭が書いた『孟子注疏』に初めて「孟姜女」

の名前を見出すことができる。その一節を掲げてみる。

齊庄公襲莒。戦而死。其妻孟姜向城而哭。城為之崩。^⑤

齊国の庄公が莒（現在、山東莒県）を征伐した時、杞梁は戦死した。彼の妻「孟姜」は城に向かって大声で泣くと城が崩れてしまった。

上の記載では「杞梁の妻」が「孟姜」と変わっている。だが、彼女が号泣する場所は「万里の長城」ではなく、単に「城」である。『孟子注疏』以降、「杞梁の妻」は「孟姜」と伝えられ、「長城」の構築と組み合わせ、彼女は築城悲話の主人公と変わったのである。

このように春秋の『左伝』、戦国の『礼記』から、漢代の『列女伝』、唐代の『杞梁妻』、北宋の『孟子注疏』にかけて、時代の変化とともに孟姜女のお話内容は変わっているが、大河の如く、二千年以上も絶えることなく現代に伝承され、広く流れ来たのである。

実は、有吉佐和子はずっと孟姜女のお話に関心を寄せており、その関連の中国典籍を多く蒐集している。そうして入手した史料の内容は、上述の内容とほぼ同じである。これらの資料を、彼女はすべて『孟姜女考』に書き入れたのであることがわかる。

「左伝」の中に「杞梁の妻、夫を哭す、城崩る」という記事があり、「孟子」の中にも「杞梁の妻善くその夫を哭して国俗を變ず」とあり、それはつまり齊の莊公が莒の国を征伐したときに随行した大夫杞梁が戦死したとき

の記録であって、実説は万里の長城と時代も事情も違うのであった。夫の柩を出迎えた孟姜が、泣きながら「上は則ち父なく、中は則ち夫なく、下は則ち子なし、將に何を以てか節を立てん」と嘆き、琴をかきながらから溜水に身を投げて死んだという具合に、「古今注」に解説がある。「烈女伝」では更に杞梁の妻が夫の死後よるべないまま遺体を枕にして城下に号泣すること十日、城壁はこれのために崩れたということになっている。

なお、孟姜女の話については、中国では民間のほうが史料記載より影響力が大きい。それに地域によって特色がさまざまである。顧頡剛教授は各地に散在した孟姜女のお話を網羅し史実と結び付け、『孟姜女故事研究集』（中山大學言語歴史学研究所、一九二八年）にまとめた。それは中国国内では孟姜女研究の権威的な書物として認められている。有吉佐和子もこの点に詳しく、『孟姜女考』においては、「歴史家の考証的著作として『孟姜女故事研究』というものがあることも知った」と書いている。したがって、有吉は立体的な孟姜女像を立てるために、史料だけではなく民間の伝説や逸話までも細かく調べてきたと言える。

三、『孟姜女考』から見た孟姜女のイメージ

前節で述べたように、『孟姜女考』には有吉佐和子の訪中体験が、そのままに映されている。この小説に登場した女性三人、つまり万里の長城の悲話にまつわる「孟姜女」、その悲話を述べる中国人通訳「趙秀桂」、それを聞き取った日本人作家「会田崎子」。その「会田崎子」は、実は有吉佐和子自身である。

登場人物だけではなく、『孟姜女考』の文体表現も『紀ノ川』とよく似ているようである。『紀ノ川』は母娘孫三代

の女性をめぐるって描いた物語であり、女性三人の運命を通して、それぞれ明治、大正、昭和の社会の有様を露呈している。女性の運命を巧みに捉える有吉は『孟姜女考』において、伝説人物「孟姜女」、中国人通訳「趙秀桂」と日本人作家「会田崎子」をめぐるって時代の変化をあらためて語っているのだ。

孟姜女のイメージは、時代により少し違いがある。立体的な孟姜女のイメージを作るために、有吉は史料を調べ、現地を見学し、散在した孟姜女の記事を考察してきたと、みずからが作品の中で語り手に語らせている。そして有吉は見聞したことを『孟姜女考』に書き込んだ。それらを、以下のように整理してみる。

第一、世間知らずの箱入り娘

車中で通訳の趙秀桂は会田崎子と同行者に、「孟姜女は深窓に育ったので、父親以外の男性を見たことがありません。」と言いき、続いて「自分を最初に見た男の妻になろうと思いきめていました。」とある。趙秀桂の話によれば、孟姜女はめつたに外へ出ずに家で大事に育てられた娘らしい。生活習慣どころか、考え方さえかなり保守的な封建社会の女性が推測できる。社会的地位も、非常に低い。結婚後まもなく夫は万里の長城へ賦役に出されたので、家に残された孟姜女は涙で明け涙に暮らしていた。それにしても、孟姜女は依然として貞節をかたく守っている。ある日、夢で夫を見たので、旅立って夫を探しに行くことを決めた。長城に着いた孟姜女は、工事場の人に聞くと、夫がもうなくなつたことがわかつた。そして、「モンチャンニューイは、あまりのこと打ち伏して、三月の間、涙が止らなかつたといひます。その涙が、万里の長城の中にしみ透り、土を流し、石を動かして、ある日それが崩れ落ちると、中からモンチャンニューイの夫の骨が現われ出た」のであつた。

第二、人民英雄と目される孟姜女

同行者の日先生も会田崎子に孟姜女の記事を述べていた。それは趙秀桂の紹介と全く異なつたイメージであつた。

日先生は孟姜女を気性の勝った女性であると説明した。「人民英雄というのは（中略）孟姜女の方らしいよ。亭主の方はすぐ死んでしまったんだから、なんでも秦の始皇帝が泣いている孟姜女を後宮に入れようとしたら、孟姜女は勇敢に闘争しました」。会田崎子は、日先生の話を知ると、強権を恐れず搾取階級に対して、勇敢に抗した人民英雄の孟姜女を感じとったのであった。

第三、大女である孟姜女

自称中国通である五十歳のCさんは、ある雑誌の編集長であるが、終戦まで三十五年にわたって中国で暮らしていた。彼は会田崎子に孟姜女の外貌を面白く紹介してくれた。「大女ですよ。孟姜女は。（中略）柳腰だの纏足だのつてのは、本当の支那人の好みじゃないんだ。支那人というのは男でも女でもしぶとくつてねえ、僕は苦力ケリなんかと一緒に寝起きた頃もあるから分かります。（中略）支那人はでかい女が好きなんだ。石臼みたいな尻を持つてなきゃ」。Cさんの紹介した孟姜女は大柄で力が大きい。これまでの説明は、ほとんどが孟姜女の性格に関する描写であった。彼女のスタイルに関する説明は、このCさんが初めてである。しかし、「崎子には大女の孟姜女は想像できなかった」。

第四、「孟姜女の寺」にある孟姜女の座像

会田崎子と案内者の楊さんとは山海関にある「孟姜女の寺」に来て、そこで初めて孟姜女の座像に遭遇する。「孟姜女の寺」は実は「孟姜女廟」と呼ばれ、河北省にある山海関から六キロ離れている場所にある。孟姜女の座像については、有吉は次のように書いている。

等身大の、およそ芸術的でない稚拙な人形で、白い布で頭を包み、黒衣を身にまとっていたが、その顔は胡粉で平坦に塗りこめられ、大きすぎる眼は児童画のようで、見れば恨みがましく見えないこともない。紅は唇に濃く、そこだけの彩りだった。が、ともかく美貌とも幻想とも無縁の泥人形で、それが絵具の色もなまなましく塗りた

てられていたのだから、崎子の詩情を傷つけること甚だしいものがあつた。これは見ない方がよかつたと崎子は悔んだ。物語の女主人公ならば、せめて可愛い小さな人形であつてほしかつた。崎子の目に、それはどうにも大さすぎた。

このように粗末で醜怪な泥人形を見て、有吉はきつと驚いたに違いない。その座像は前もつて有吉の心に残つた、あの美しく可憐な孟姜女イメージとは別人だつたのだから。ショックを受けた有吉佐和子は、会田崎子の口を借りて、「この国」は「美女のイメージをも変革してしまふ」と嘆いている。

四、趙秀桂が登場する意味

『孟姜女考』には、会田崎子とはまったく違う文化の背景をもつ趙秀桂という人物が登場する。そのことは、何を意味しているか。つまり、趙秀桂を通して有吉は何を伝えたいのか。初の訪中後、一九六一年十月、有吉佐和子は、『世界』一九〇号に、「三人の女流作家」という文章を掲載した。その文章の一節に、次のようにある。

万里の長城へ出かける日の朝、私は馮鐘璞女史に紹介された。(中略)馮さんは万里の長城を作る間に生まれた一つの物語を聞かせてくれた。それは猛^{マウ}笮^{ジャク}女という美しい女が夫を長城の建設に送つたあと、病んだと聞いて遙かな道を歩いて会いに着たが、既に彼は死んでいたという悲話であつた。

この記述から分かるように、中国人の通訳である馮鐘璞は、訪中の際に、有吉佐和子に対して、孟姜女の故事を聞かせたのである。実は、馮鐘璞(一九二八-)は北京出身で、中国社会科学院外国文学研究所に勤め、著名な小説家、

翻訳家であり、筆名は宗璞である。また彼女の父親は中国著名な哲学者馮友蘭（一八九五―一九九〇）である。『孟姜女考』においては、馮鐘璞をモデルとした趙秀桂は、次のように描かれている。

趙秀桂と名乗った彼女は、英語で直接崎子に話しかけてきた。背が高くほっそりした体つきで、髪にはパーマネントをかけ、白いブラウスに青磁色のスカート姿だった。三十歳前後と思われたが、清新な雰囲気の良いひとであつた。挨拶の握手をするとすぐ車に並んで腰を下ろし、出発したのだが、初対面の緊張は却って二人の女を喋りに喋らせた。（中略）中国人特有の甲高い透きとおるような美声で繰り返し返すと、まるで詩の朗読を聞いているようである。（中略）趙女士の声は日本のいかなる声優にも真似手がないと思われるほど高く美しかった。

有吉から見れば、趙秀桂は清新な雰囲気の良い人であり、鈴を転がすような声の持ち主だったのだ。有吉は趙秀桂のイメージを借りて、新中国における女性の社会的地位を確かめているのだろう。趙秀桂の経歴や才能を詳しく描いている箇所がある。要約すると次のようになる。

其の一、北京大学の英文科を卒業して、今は出版社で英文中訳や中文英訳をしている。

其の二、童話作家をめざして、読める限りの世界中の童話を読んでいる。

其の三、会話の時の文法は、英語にも日本語にもない不思議な飛躍を見せることがあつたが、語彙は崎子より豊かである。

ここに見られるように、「女子無才便是德」（学才のない女性は美德を持つ人である）と考えられた孟姜女が生きた封建時代とは異なり、新中国で養育された趙秀桂は、文盲から抜け出し、正式な高等教育を受けることになった才媛である。文化的修養を積んだことに従い、心の中に自信が出てきて、性格も明るくなったのである。英語を母国語とする者ではないとしても、彼女は恐れずに外国人と会話を交わすことができる。また、読める限りの世界中の童話を読

んでいることから見れば、夫の中心とする孟姜女と違い、趙秀桂は高遠な理想を抱える新時代の女性の代表であったといえる。また、次のように、趙秀桂のような知的女性は社会的地位が高くなっており、男性よりもすぐれた仕事の能力を持っている。

通訳の青年が訳し終わらないうちに、趙女士が突然激しい口調で、それまでの趙女士からは考えることもできなかった激しさで、何ごとか早口にまくしたて始めた。日本人にはむろん何がなんだか分らない。上司を初めとして、中国人男性たちは黙って聞いている。こう見たところ彼女に叱責されて彼らはうなだれているようにしか思えなかった。

昔の中国には、女性への性別ハラスメントが溢れている。女性たちは皆、孟姜女のように深窓に育てられ、父親以外の男性を見ることができない。それに、「三従」と「四徳」を守らなければならない。新中国の成立後、この風習が一掃されて、女性の地位が高くなった。趙秀桂は社会に進出できるようになったのである。彼女は、男性と一緒に働いているばかりではなく、みずからの発言権を持ち、不合理なことがあれば堂々と拒否することができた女性であった。

さて、中国では一九三一年に公布された『中華ソヴェト共和国憲法』においては男女平等が提出された。女性の解放運動はその頃からだんだんと盛んになっていった。それに対して、日本では五〇年代から西欧社会のフェミニズムを受けて女性の解放運動を發したが、七〇年代に至り、正式に「女性解放」と「女性拡張論」のようなスローガンが出ている。

有吉は一九六一年の訪中で、馮鐘璞と知り合いになった。『孟姜女考』の成立は馮鐘璞との交流から生まれたものと言っても過言ではない。また、有吉は才色兼備の馮鐘璞を仰ぎ、趙秀桂という名前を『孟姜女考』に書き込んだのである。新中国に育てられた趙秀桂こそ、孟姜女との比較を通して誕生した、新中国での女性の現実だったのだから。

新中国における女性の變化は、有吉佐和子の執筆の動機でもあったのではないかと思われる。

五、会田崎子の視点

『孟姜女考』の語り手・会田崎子は、有吉佐和子の分身を思わせる女性である。なぜなら、有吉佐和子の訪中経歴を記すエッセイに、それらの幾つかの証拠を見出すことができるからである。

前掲の「三人の女流作家」では、有吉が訪中団の一員として長城を見学した事実が明らかになった。「中国旅行」（一九六二年）には、「北京でも、上海でも、気温は四十三度に達するという日があり、（中略）暑氣払いに、私たちは毎夜ホテルに戻ってから、団長の部屋に集まって茅台酎（マオタイチュー）を飲んだ」と書いている。有吉佐和子は、「大陸の夏が怪物のように」と「撰氏四十二度」を、さらに「茅台酒を呑み」などを『孟姜女考』の冒頭に書き入れている。また『新潮日本文学アルバム71 有吉佐和子』には、「昭和四十年（一九六五）、中国作家協会の招きで北京に留学することになり、一歳半になる玉青と、手伝いをしてくれる女性を伴って、五月二十日に出発した。（中略）十一月に帰国」と記されている。これは『孟姜女考』の後半における「三年ぶりで北京に来た会田崎子は趙秀桂女史に会いたいと思ったが、彼女は恰度下放したばかりでまだ三カ月は帰ってこないということだった。」とあり、有吉自身の「病後でしかも子供連れ」という筋立と、ほぼ同様である。従って、作中の会田崎子の視点は、有吉佐和子のそれと重なっていることがほぼ確かめることができるのである。

有吉佐和子は一九三一年一月二十日に和歌山市に生まれた。幼い頃に横浜正金銀行（現在、三菱UFJ銀行）に勤める父「有吉眞次」の転勤に伴い、ジャワ（現在インドネシア）で過ごし、後にアメリカに留学し、ヨーロッパ

をはじめ東南アジアなどの取材旅行に出かけた。「外地に育ち、また開放的な家庭に育った有吉には、古いとされるものへの抵抗感がまったくなかった。」⁸⁾一方で、有吉は幼い頃から中国に対して親近感を抱き、「中国は世界最古の文明を持つところであり、日本の文化の古里だ」という。女学校時代から彼女は漢文学者塩谷温先生について漢文の白文素読を学び、「四書五経」の素読をやらされ、古文孝経が一卷全部暗誦することができたという。

一九六一年に第四陣の日本作家訪中団の一員になった時、有吉はときめく胸を押えられなかった。「宴会のときは華やかな和服を着るので、会場が一際あかるくなるし、「絶世的美女」といふ名が高い。我々の世代とちがって、ものに臆することなく、闊達に振舞ふので誰からも好意を持たれたやうである」と亀井勝一郎は『中国の旅』（講談社、一九六二年）に記している。彼は、後に角川文庫『紀ノ川』（角川書店、一九六三年）の「解説」を書いたが、その末尾に「女のいのち」への「鎮魂歌」であると作品を批評している。有吉佐和子にとって、憧れの「中国」への旅は、みずからの魂への遡行であったのではないか。その心情は「紀ノ川」執筆の契機にも連なっているように思われるのである。この訪中の折りに、彼女は周総理をはじめ、廖承志、老舍、夏衍らと出会っている。

その当時、中日両国の国交はまだ回復していなかったから、日本人作家たちは文化活動という形で中国を訪問するだけであった。帰国後、彼らは自分の見聞と感想などを作品にまとめて、とくに新中国の現状を日本の国民に紹介している。『有吉佐和子の中国レポート』（新潮社、一九七九年）もその中の一冊である。

六、『孟姜女考』から見る新中国の変化

『孟姜女考』においては、会田崎子はさまざまな側面から「孟姜女」の故事を考証している。一方で、趙秀桂との

交流で中国の新たな変化も確かめてきた。したがって、この小説には軸が二つある。要約すれば、一つは「孟姜女」の変遷、もう一つは新中国の変化。有吉はこの二つの軸を交錯させながら、「考」を進めている。

以下、作中に描かれる「新中国」の変化についてまとめてみる。

(一) 解放された女性

封建時代の孟姜女は、いわゆる箱入り娘であった。結婚前に父親以外の男性に会うことを許されなかった。その反対に、今、新中国に生きている趙秀桂はこの束縛から解放された女性として作品に登場している。しかも、高等教育を受ける権利を与えられている。例えば「趙女士が北京大学の英文科を卒業して、今は出版社で英文中訳や中文英訳をしている」シーンと、万里の長城からの帰途、ある男性の案内者の企画に対して、碧雲寺行きというその日のスケジュールに組まれていないコースを提出した時、「趙女士が突然激しい口調で、それまでの趙女士からは考えることもできなかった激しさで、何ごとかをまくしたて始めた。(中略)上司を初めとして、中国人男性たちは黙って聞いている」というシーンなどは、新中国の女性の地位が逆転したようにさえ見える場面である。

(二) 教育の普及

中国史上、一般に一九四九年を境に、中国は「解放前」と「解放後」とに区別される。解放後の一九五〇年代頃、総人口の八割近くを占める農民のほとんどは字が読めなかった。彼らは「文盲」と言われた。この問題を解決するために、新中国政府は全国で「掃盲運動」(文盲がなくなるように農民に勉強させる)を推進していった。そして一九五〇年代初頭以来、農民を「字を教える教室」に行かせることが広まったのである。一九六〇年代に至り、文盲が減り、

当時の農民たちは「人民公社」に配属された。「人民公社」とは、一九五八年に農村に設立された生産・行政の基礎組織を指すが、これは一九八二年に解体された。この様子は、作品には次のように記されている。

文房四宝といって紙、墨、筆、硯には中国は伝統があるのだが、新中国に粗悪な紙が多いのは、それまで読むことも書くこともなかった五億の農民たちが人民公社で組織化された教育施設によって一斉に紙を使い始めたので、それで紙が払底した結果だという説明を聞いていたのを崎子は思い出した。

有吉佐和子の見聞が、そのまま作中に活かされているが、それは彼女自身の現地体験に基づく確信に近いものであったからである。「五億が一斉に読み書きを始めたなら、それはチリ紙だってなくなってしまうだろう、と、崎子はその表現にこもっている実感に打ちのめされていた」。

(三) 盛んになった植樹運動

「解放前」の中国は無計画に伐採したので多くの山が禿山になった。「解放後」、人々は自然環境の破壊が大きな危害をもたらすことに気付いたと同時に、それを反省しながら適切な対策を講じ始めた。有吉はその環境の変化をも体験した。「中国では今、植樹運動が盛んで、どんな片田舎にも若い並木道が続くんですよ。禿山にもどんどん苗木を植えていますの。中国人はそれを緑の長城と呼んでるようでしたわ」と崎子に語らせている。

(四) 日中友好を望む中国人

趙秀桂は童話作家であり、出版社の翻訳も兼ねていた。「日本の童話」については、彼女は「中国語に訳して、日本と中国の友好に役に立てましょう」と、ストレートに自分の気持ちを表した。新中国の変化については、『孟姜女考』

から読者は十分に読み取れる。

一九六二年の九月、有吉佐和子にとって、二度目の訪中となった（一〇月）。国慶節（一〇月一日）に招待され、夫の神彰が同伴した。「神彰は廖承志と交渉して、翌年（一九六三年）中に、北京曲技団、故宮博物院展、京劇、三つの興行および展覧会を日本に呼びたいと申し出、廖承志の許諾を得た」⁹。当時、廖承志の努力で中日交流の機運が高まっていた。そして、一九六二年十一月、中国と日本はLT貿易協定を結び、ついに両国の経済交流を再開させたのであった。

一九六三年一〇月、北京で「中日友好協会」が成立した。初代の会長に就任した廖承志は、名実ともに中日交流における中国側の第一人者になった。廖承志は、同年十一月に生まれた有吉佐和子の長女「玉青」の名付け親となった。一九六五年五月、有吉佐和子は中国作家協会の招きで北京に留学。この三度目の訪中には、一歳半の玉青を連れ、五月から十一月まで北京に滞在したのである。また国慶節を祝う日に、有吉は玉青とともに天安門広場で記念撮影をしている。その折に、玉青が手にしていた「千歳飴の袋の字は廖承志の書である」¹⁰。

ちなみに『孟姜女考』の後半において、子供を連れた崎子が、避暑地「北戴河」の外交部修養所に泊り、所長の案内で山海関などを見学している場面があり、これは、有吉自身の体験に合致する。三度の訪中体験を経て、有吉には中国への関心や理解度が徐々に募っているのが分かる。

中国の将来性に期待する有吉佐和子にとって、新中国は、両国の友好樹立を信じた理想の時代だったといえる。『孟姜女考』は、そのような時代に書かれた幸福な作品の一つであった。ここには、双方を理解しようとする人の温もりが、ボールをはぎ取るようにして書かれている。それが、有吉佐和子の文学なのである。

おわりに

以上考察したように、『孟姜女考』では、古代の「孟姜女」と新中国の「趙秀桂」との比較を通して、中国女性の社会地位の変化が明らかになる。さらには、新中国の知識人「趙秀桂」と日本人の作家「会田崎子」との交流を通して、日中友好の未来を期待する作家・有吉佐和子の姿が看取される。同時に作家・有吉佐和子は、主人公会田崎子の視線に重ねあわせて、新中国における大きな変化や中華文化への憧れなども表現している。「考」とはさまざまな側面から、孟姜女の記事を考証するだけではなく、中国の新たな変化を考察したことを意味する。

つまりは、伝承への逆行であり、また新中国の淵源と現実とを確かめることになった。すでに記したように、この作品は、後の「紀ノ川」執筆のモチーフとなったと思われるのである。「紀ノ川」には、女性を通して、日本の伝統の継承と、それへの反発とが描かれ、華子（有吉佐和子自身がモデル）の現在と未来とが、象徴的に描写されている。「紀ノ川」における華子は、自身の体内に流れる伝統の精神を自覚し、それを現在・未来へと発展させる宿命を担わされた女性として描かれているのである。

(注)

- (1) 李宗侗註『春秋左伝今註今訳』（台湾商務印書館、一九八二年）九二七頁。
- (2) 朱彬撰・饒欽農校注『礼記訓纂』（中華書局、一九九六年）一四九頁。
- (3) 劉向撰・張敬校注『列女傳今注今訳』（台湾商務印書館、一九九四年）一七一頁。

有吉佐和子における中国題材小説の考察（張）

- (4) 郭茂倩編『樂府詩集』（中華書局、一九九八年）一〇三三頁。
- (5) 趙岐注・孫奭疏『孟子注疏』〈十三經注疏之十三〉（上海古籍出版社、一九九〇年）
- (6) 有吉佐和子『中国旅行 井上靖文庫七』（新潮社、一九六二年）
- (7) 宮内淳子編『新潮日本文学アルバム71有吉佐和子』（新潮社、一九九五年）六六頁。
- (8) 注（7）と同じ、二九二頁。
- (9) 関川夏央『女流林芙美子と有吉佐和子』（集英社、二〇〇六年）一八七頁。
- (10) 井上謙・半田美永・宮内淳子編『有吉佐和子の世界』（翰林書房、二〇〇四年）一六三頁。

〔付記〕 本稿に引用した本文は『孟姜女考』（新潮社、一九七三年）を底本とした。なお、本論文は、河南省哲学社会科学研究項目（番号2017BWX011）の研究成果の一部分である。

（ちょう ぶんこう 河南師範大学教授）